

神戸の芸術文化の未来を考える 第1回、第2回フォーラムに寄せて

全2回のフォーラムのファシリテーターを務めてくださった神戸親和大学の松田学長より、フォーラム全体を通じ、コメントをいただきました。

(以下、松田学長からのコメントを掲載いたします)

第1回フォーラムでは、「神戸市室内管弦楽団への公的支援のあり方」をテーマに、市民や関係者の皆さまと議論を行いました。議論の中で印象的だったのは、「現在の楽団のあり方がこのままでよいとは思わない」という声がある一方で、「だからといって、地域の文化資産としての楽団が失われてよいとも思わない」という意見が多く聞かれたことです。支援か廃止かという二項対立ではなく、どのような条件であれば市民の理解と共感を得られるのか、という視点の重要性が共有されました。その中で、以下の3つの論点が共通認識として浮かび上がりました。

① 公共性と公益性

公共性とは、誰に対しても開かれた存在であること。公益性とは、不特定多数の市民に対して価値や利益をもたらすことです。

公的支援を受ける以上、楽団は一部の愛好家だけのものではなく、市民に開かれた存在であることが求められます。同時に、教育・福祉・地域づくり・文化継承などを通じて、神戸市民にどのような価値を提供しているのかが問われます。

② 自助・共助・公助のバランス

文化芸術を支える仕組みは、公的支援だけで成り立つものではありません。

楽団自身の努力による「自助」、市民や企業、地域による「共助」、そして行政による「公助」が適切なバランスで機能してこそ、持続可能な文化活動につながります。その観点から、現在の支援のあり方について改めて考える必要があるのではないか、という問題提起がなされました。

③ 議論の透明性

音楽文化は神戸のまちにとってどのような意味を持つのか。公的支援はどのような条件で正当化されるのか。

こうした議論は、一部の関係者だけでなく、市民に開かれた場で透明性高く行われることが重要です。本フォーラムもそのための対話の場として開催されました。

以上を踏まえ、第2回では、「文化への公的支援が市民に理解されるためには、どのような条件が必要なのか」をテーマに、さらに議論を深めることとしました。

第2回フォーラムでは、楽団そのものだけではなく、神戸における文化芸術活動全体への公的支援のあり方について議論しました。前회가当事者間の課題整理であったのに対し、第2回では文化、教育、地域活動、企業経営など多様な立場からパネリストを迎え、より広い視点で議論を行いました。その中で、特に重要だと感じた点を三つ挙げます。

① 公共性・公益性は一つではない

公共性や公益性は単一の尺度では測れません。

子どもたちの文化体験を支えることも公益性です。地域のつながりを育むことも公益性です。市民の Well-Being の向上や、都市ブランドの形成、神戸の魅力向上に貢献することもまた公益性の一つと考えることができます。

今回の議論を通じて見えてきたのは、文化芸術の価値は多面的であり、それをどう評価するかについても多様な考え方が存在するということでした。

② 支援を受ける側の説明責任

公的支援を受ける以上、その価値を社会に伝える努力も求められます。

特に議論の中で繰り返し指摘されたのは、「市民に知られていること」の重要性でした。存在そのものが十分に認知されていなければ、その活動の価値も伝わりません。

今回の報道を通じて楽団の存在を初めて知った市民も少なくありませんでした。この出来事を契機として、市民との接点を増やし、地域の中でより親しまれ、理解される存在になることが求められていると感じます。

③ 公共性と持続可能性を両立させる

公共的な活動と収益性は必ずしも対立するものではありません。

市民との接点を増やし、音楽文化を支える人や応援する人を増やしていくことは、結果として自主財源の拡大や持続可能な運営にもつながります。

これからの課題は、「支援するかしないか」という議論にとどまることなく、神戸の文化芸術を支える人や場をどのように増やしていくかということにあります。子どもたちの体験機会の創出、若い世代の文化の担い手育成、潜在的な文化ファンとの接点づくり、企業や地域との連携など、文化の関係人口を広げていく視点が重要です。

神戸には、音楽をはじめとする豊かな文化資源があります。大切なのは、他都市の事例をそのまま模倣することではなく、「神戸として、文化をどのように支えていくのか」を市民・文化団体・企業・行政がともに考えていくことです。

今回のフォーラムを通じて生まれたつながりや議論を一過性のものとせず、神戸らしい文化の将来像とともに描いていくことが、これからの大きな課題であり、可能性でもあると考えています。